

巻頭言

真理はあなたを自由にする

立教大学チャプレン トーマス・プラント

私自身の直近の卒業式は博士課程を修了した2021年の時でした。学長の前に跪き、合掌することが求められました。そして、学長は私に「父と子と聖霊のみ名によって」学位を与えてくださいました。もちろんそれはキリスト教に倣った言い方でしたが、学位が聖三位一体の名で与えられたのは、私の学問の内容や個人的な信仰とは関係がありませんでした。立教学院と異なり、私が学位を得たその大学は自らをキリスト教学校とは呼んでいません。そのような所作とやり取りは、単に中世の創立当時から受け継いだ習慣でした。その中世ヨーロッパの大学創立者は、なぜ、卒業生に学位を与える際に「父と子と聖霊なる神」の名を唱えるべきだと考えたのでしょうか。

ここで「卒業」という言葉に注目してみます。英語の「graduation」はラテン語の「gradus」、つまり「段」という言葉に由来しています。学者は学位の階層を下から上へ上がっていきます。この学位の階層は卒業者が身にまとうフードとガウンの形と生地と質に示されています。例えば、学士は短いガウンと羊毛の裏つきフードを、修士と博士は長袖ガウンと絹やビロード地の裏つきフードを身につけます。これらは元をたどれば聖職者の衣装でした。大学はすべて教会の中に設置され、学生は皆、学んでいる分野にかかわらず、修道士としての礼拝生活を送ったので、そのような衣服をまといました。15世紀になってようやく、その衣服は聖職者よりも学者に結び付くようになりました。そして1604年からの英国国教会の教会法によれば、聖職者は自分の学位のフードを祭服とすべきとされています。この定めはなにも聖職

者が学歴を誇示することを目的とした訳ではなく、全ての知識を神が使えることを表しています。そのうえ神は万物の源なので、知識は学ぶ者を神へと導いてくれます。中世の大学の創立者からすれば、知識を得る目的は神をもっとよく知るためでした。

現代では「知識は力」という諺が流行っています。15世紀のイギリス人哲学者フランシス・ベーコン卿からの表現です。ベーコンは人間が世界を技術で服従させることにより、自由を見つけられると考えました。彼にとって自然は牢獄でした。ベーコンの後継者で、啓蒙運動の哲学者ジャン・ジャック・ルソーは、この原則を社会にも拡大しました。社会の慣習は個人の自由にとっては堪らなく重荷でした。ルソー自身がその重荷から逃避した例えとして、彼の5人の子供が生まれた時、すぐさま子供たちを孤児院に捨てさせたりしました。ルソー以降では、フランスの革命家が彼の哲学に憧れて、社会進歩を邪魔したとの理由で、婦女子を含め5万人ものカトリック信者を殺害したことが挙げられます。しかし、20世紀になり初めて、ベーコンとルソーの思想が結実してきました。自然と社会の束縛から解放された西洋は、人間と自然環境を滅ぼす当代無比な技術と制度を発展させてきました。20世紀のいくつかの戦争により1億2300万人もの人々が亡くなっています。また平時でも、共産主義諸国は少なくとも1億人にもものぼる自国民を処刑しました。マルクスの思想はルソーの思想を直接に引き継いでいますし、資本主義と共産主義の双方は自然、社会と神からの解放という理想に由来しています。現代技術は私たち人

間の健康に大きな利益をもたらしたとはいえず、全面的に成功をもたらしたとは言えないでしょう。

無制限に自由な力を得るための教育は、キリスト教の学校に不似合いです。ルソーたちにとって神のようになることとは、絶対的な権力を持つことを意味しますが、実際は絶対的な権力を求めることはキリストではなく、むしろサタンのような存在になることです。砂漠の中で、サタンが主イエスにそういう無制限な力を貸すことを申し出たとき、イエスはそれを断りました。なぜなら神は独裁者ではなく、聖三位一体な存在だからです。父と子と聖霊の一体が神であり、神の本質は愛し創造することです。神の「自由」というのは、自分の本質に逆らうことではなく、その本質に従うことなのです。神の「力」というのは愛の力です。愛するからこそ、神は自らが造ったものを救うため、か弱い存在となり、主イエスの姿でこの世に降りました。神が人間を自分に似せて創造したというのは、その形だけを意味するものです。

中世の大学を創立した者たちからすれば、自分の欲望に従うために学ぶのはまったく意味のないことです。富や名声を追い求めるのは決して自由になることではなく、それらの奴隷になることにほかなりません。自由への第一歩とは、物質的利益を欲望することは魂の牢獄に繋がれることだと気づくこと。言い換えれば、好きなブランドに囚われないことです。ものを消費することを重ねても、ひとは自由になれるわけではありません。動物でも消費することは可能です。人間にしかできないことは、創造するという行為であり、私たちはその精神的な力を備えています。私たちは何かを創り、他者に自由に与え、教室の中で学んだことを超えてこそ、人間の存在意味を理解するようになります。美德を備える訓練を積むことで、言葉を超える真理である

神に徐々に近づいて行けるのです。

神が三位一体であるのに似て、人間は社会的な生き物です。悪い社会の慣習は人間を傷つけますが、愛に基づいた社会の慣習は人間のよい成長に必要なものです。社会の慣習が重過ぎると個人に害を及ぼしますが、またその反対も危険といえるでしょう。社会的な制約を放棄した欧米では人びと、特に若者、老人、貧しい人たちが寂しい思いをし、悩み、道に迷うようになってしまいました。自由とは制約に頼ることであります。音階の訓練をしないピアニストは、決して即興演奏ができるようにはならないし、型の稽古をしない空手家は、自由に試合に臨めるようにはなりません。良い人間になるのも、これと同様です。美德であることの基本を鍛錬しなければ、人間の真の本質を理解できないばかりか、欲望の奴隷としてあり続けるだけで、決して自由に生きられるようになりません。

主イエスは「私は道であり、真理であり、命である」と仰いました。したがって、キリスト教会は真理を優先する教育制度を恐れるべきではありません。しかし、自由と力そのものを優先する学校は、そこで学ぶ者を奴隷にしてしまいます。善と真理を求めるのは本当の自由への道であります。それこそがキリスト教の最初の大学の創立者の目的でした。

立教学院を卒業した皆様が、私たちに自由にする真理を求め続けるように祈ります。



イギリスの大学の伝統的な卒業式